文化情報松山

きらめき

2021　秋号　Vol.97

●秋彩る「松山市民文化祭」開催
●三輪田米山二百歳
●松山の歴史
●子規交交　第一回『どこにも行けなくとも』

松山市民文化祭「第40回美術展」市長賞「野ぶどう」（工芸部門）河野 光江

三輪田米山二百歳

愛媛大学俳句・書文化研究センター長
三浦 和尚

三輪田米山（みわだべいざん）は江戸から明治にかけて生きた伊予の神官で、一八二一（文政四）年に、伊予国久米郡（現在松山市南久米町）の日尾八幡神社神官三輪田清敏の長男として生まれ、一九〇八（明治四一）年十一月にこの地で亡くなりました。

米山のとらわれのない豪放な書は近代芸術書の先駆けとして全国的に高く評価されています。

一　米山生誕二百年記念の動き

今年の二月十二日、郷土の書人三輪田米山は、ご存命であれば二百歳の誕生日を迎えました。

これを記念して、愛媛県美術館、坂の上の雲ミュージアム、愛媛大学などで展覧会やシンポジウムなど記念の行事が展開されています。先駆けて今年の一月から二月、大阪市立美術館では、「生誕二百年三輪田米山―大阪中之島美術館山本發次郎コレクション」という展覧会が開催されました。山本發次郎は米山作品の最高のコレクターです。米山を「あの明月、良寛、寂厳、慈雲らに劣らない、あるいはどうかすると大字においてはこの四者にも勝り、格においては慈雲に次ぐものではないか」（「無名の書聖　三輪田米山」）と賞賛し、松山に逗留して多くの米山の秀作を集めました。その収集作品を今秋愛媛県美術館で見ることができるようです。

また、今年三月、三輪田米山生誕二百年記念事業実行委員会が組織され、坂の上の雲ミュージアムや愛媛大学の展覧会等を推進するとともに、松山市内の小中学生を対象にした「俳句と書のコンクール　筆で書く五七五」を開催し、三輪田米山の周知、顕彰を行っています。

このコンクールは、伊予の誇る俳人正岡子規と、書人三輪田米山をコラボした企画となっており、子どもたちがこの機会に、改めて郷土の偉人を意識してくれたらと考えています。それは必ず、地域を誇りに思う気持ちにつながるでしょう。松山市（教育委員会）では、『ふるさと松山学　語り継ぎたいふるさと松山　百話』という本を小中学生用に刊行し、郷土意識の涵養につなげていますが、その中にも当然三輪田米山は紹介されています。

二　書の修練

米山の祖母里与は、書で著名な明月の姪にあたる人で、米山に手習いをすすめました。二十歳過ぎから、当時の伊予の書の第一人者、藩校教授の日下伯巌にも学びましたがそれで満足せず、のち、王羲之に出会うことによって米山の書の方向性が決定されることになります。

米山は、

「子昂趙松雪道人の墨本を六年間昼夜学習す。淳化法帖、絳帖を数百ぺん習ふ。其後王右軍ばかりを昼夜習ひしなり」

と、自身の書の学びについて述懐しています。今日的にも書の古典の基本中の基本といえる王羲之に、書の師に導かれたわけでもなく自らの感覚でのめりこんでいったというところに、米山の独特の感性がうかがえると思われます。しかもそれは、王羲之の形をひたすら忠実にまねるという学びではなく、王羲之の呼吸を自分のものにし、昇華して、米山独自の書の世界を構築していったものです。

書の専門家は、王羲之の影響を明確に指摘しますが、素人目に「よく似ている」とはとても言えないのが米山の書ではないでしょうか。

米山はこのような書の学びを経てのち、当時の書の主流であった日下伯巌の書にも懐疑的な目を向けるようになります。それは逆に言えば、米山が自身独自の書・書法を見出す過程であったということもできるでしょう。

三　三輪田米山の書

今、米山は書でその名を全国に高めていますが、今のような「書家という芸術家」ではなく、久米八幡神社の神官という

▲松山市南久米町の日尾八幡神社の注連石（しめいし）に米山が書いた「鳥舞 魚躍」があります。

のが本来の姿だったというべきでしょう。私自身は「書家三輪田米山」がいるというより「三輪田米山の書」があると考えています。今のような書をもっぱらに生活している「書家」は、祐筆などの職業的なものを除けば、江戸以前にはほぼいなかったといってもいいかと思います。

ただ、言うまでもなく、それは米山が書の素人だったということではありません。だれよりも力強い、破格の書は、近代書の先駆けと言われ、評価されています。空海、嵯峨天皇、良寛などが今のような「書家」と言えるかどうかということと同じです。

米山の書は、学校で学ぶ「書写」のような感覚で見ると、稚拙に見えることがあります。事実、昔の久米村あたりでも、子どもたちの間で「ミミズがのたくった」というような言い方をされていたという話は聞きます(本当かどうかは時間を経ているので定かではありませんが)。書写的な意味で「形が整っていない」というならともかく、「ミミズがのたくった」というならむしろ亀田鵬斎ではないかとも思うのですが…。米山が池大雅を評価しているのは、そういう流れで考えると理解できるかもしれません。

▲「萬年壽」の書

私自身、初めて日尾八幡神社の注連石(しめいし)の「鳥舞　魚躍」を見たときは、「へんてこな字だ」と思ってしまいました。特に「舞」の真ん中の縦四本の画は、書写的には等間隔が望ましいはずですが、等間隔にはなっていません。あとで気づけば、米山の「舞」や「無」は、ほぼ等間隔ではなく、そのアンバランスが一つの魅力になっていると言えるのですが、中学校国語科教師の経歴があり、芸術的感性に欠ける私は、教科書的に「へんてこな」と思ってしまったのです。

しかしその後、愛媛大学教育学部の書道をご担当の冨田一抱先生(故人)や菊川國夫先生と親しくさせていただき、お話を伺ううちに、米山の書がなんとも魅力的なものに思えてきました。ちょっと癖のある食べ物に慣れると、とてもおいしく、食べずにはいられなくなるのと似ているかもしれません。

その点、松山市の大山積神社の社号の石文の前で何時間も見入ってしまったといわれる小学校時代の小池邦夫先生(絵手紙作家)とは、まったく芸術的感性の質が違うと思わされます。

私はその後、伊予豆比古命神社(椿神社)の力強い「龍游　鳳舞」を見て、米山書への恋の病を本格的に発症してしまいました。「鳥舞　魚躍」の飄逸な味も今は大好きです。

四　米山書の評価

米山の書は、例えば高校書道の教科書に載るほど、高く評価されています。

その特徴は、力強さ、爆発的なエネルギー、豪放、奔放、雄大、雄渾、破格、とらわれのない、超脱、超俗、俗臭のなさ、純朴、天心自在、洒脱、などの言葉で語られています。

じっくりと対坐し、自身の自由な感性で味わっていただくのが一番かと思います。玄人は玄人なりに、素人は素人なりに、何かを感じ、楽しめるのが米山作品だと思っています。

以下、近年の主な展覧会の開催を記録して、評価に変えたいと思います。

[参考　米山の展覧会]

・愛媛県美術館「三輪田米山名作展」(一九九〇)
・久米公民館「三輪田米山書展」(一九九〇)
・成田山書道美術館「三輪田米山の書」(二〇〇四)
・日本書芸院役員展特別展「雄大・純朴の書　米山」(於：大阪　二〇〇六)
・愛媛県久万高原町立久万美術館「伊予の豪傑　吉田蔵澤・三輪田米山」(二〇〇六)
・椿神社「米山没後百年展」(二〇〇八)
・東京銀座セントラル美術館「米山生誕一九〇年展」(二〇一〇)
・愛知県美術館「三輪田米山展」(二〇一二)
・松山市立子規記念博物館「三輪田米山の世界」(二〇一二)
・椿神社「三輪田米山特別展」(二〇一四)
・徳島県立文学書道館「とてつもない書—米山の大字」(二〇一五)
・書壇院ギャラリー(東京)「三輪田米山魂の書」(二〇一九)

このほか、愛媛大学では、二〇一〇年八月以来、十回にわたって継続的に米山関係の展覧会を愛媛大学ミュージアムで開催しています。

書家個人の名前を冠した展覧会は、歴史的書家のものは意外と珍しく、その一点でも米山の評価を伺うことができます。

五　三輪田米山という人

米山は「体格抜群、偉丈夫の風格を備えていた」(浅海蘇山『米山　人と書』墨美社　一九六九)とあるように、体格のしっかりした人でした。一方、性格は極めて謹厳で、神官としての働きをきちんと務める人でもありました。

米山の人となりや人生については、

・高市俊次『瓢壷の夢』(新人物往来社　一九八七)
・愛媛子どものための伝記刊行会『愛媛子どものための伝記　第十七巻　吉田蔵沢・下村為山・三輪田米山』(愛媛県教育会　一九八八)
・松山市教育委員会『ふるさと松山学

語り継ぎたいふるさと松山　百話』のシリーズのうち『まつやまだんだん物語』『人の活（いき）町の粋（いき）』二〇一一（米山の伝記的紹介）

などから知ることができます。『瓢壷の夢』は伝記小説ですし、そのほかは子ども向けのものですから、きわめて平易です。『まつやまだんだん物語』の米山の章は「正義の心」という題で、手習いに来ている子どもたちの身分によって扱いを変えなかったこと、また『人の活　町の粋』では、「努力の積み重ねから生まれた書」というタイトルで、米山が勉学に対してまじめに努力する人であったことが語られています。米山の逸話として、浅海蘇山著『米山人と書』（墨美社　一九六九）に例えば次のようなエピソードが記されています。

○米山が神社の拝殿の奉納額の文字の低俗なのを見て、「取りのけるには手が穢れる。蹴り落とすには足が届かぬ。」といった。

○お酒を沢山お上がりて、字を書かれるときはナワをタスキにされて筆をとられたが、紙の上に転びそうになられるので、後ろから抱えて上げました。

○幟を頼んだとき余り沢山お酒をのまれるので、「先生そんなにのまれては書けますまいが。」といったら、「馬鹿いえ、畑寺の幟を見い。わしが一番酔って書いたあれが一番ようできとろが」と言われた。

米山と酒については、切り離して語れないと思われるほど、いろいろな逸話があります。事実、米山日記にも、

○（扇を認（したた）む）酒をのみし故よく出来る（明治一七年八月一九日）

○無酒にて認めし故、いつもほど出来よろしからず（明治一九年四月一九日）

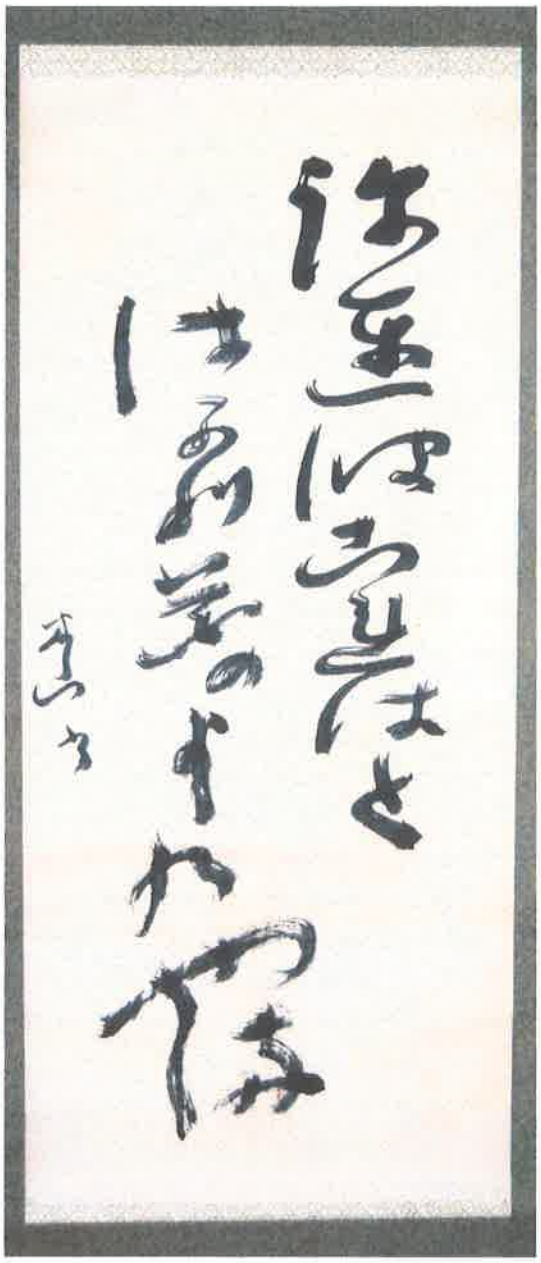
等の記述があり、酒があってこそよい書が書けると自覚しているように思われます。

この点について私は以前、次のように記したことがあります。

「言うまでもなく、米山は「論語」「孟子」など中国古典や「万葉集」「古今和歌集」など広範にわたってよく勉強した人である。米山が書いた古典和歌は、浅海蘇山の『米山　人と書』（墨美社　一九六九）によれば、「万葉集」「古今和歌集」に限定しても一四六首が数えられている。

また書については、王羲之をはじめとする書の古典を深く学んだ人である。法帖である『淳化閣帖』を数百回手習いしたという記述もあり、一日に樽桶一杯の水がなくなるまで書の練習をしたという話もある。

しかし、書の古典を深く学んだからこそ、それにとらわれるということはないか。米山は、小手先の技術にとらわれることを嫌ったのではないか。俗臭から離れ、本当に自分の中にしみこんだ、自分自身となった筆法だけを頼りとし、自分独自の書をなそうとしたのではないか。そして、すべてから解放され我を忘れるような境地に至るために、酒の力を必要としたのではないか。



▲「これはこれはとばかり花の吉野山」の書

そういう超脱の境地を求めたのは、米山が神に仕える身であることと無関係ではあるまい。あるいは、久米の地に閉じ込められた身でも、書においては世界と伍することができるという米山の自負が、そこまでの境地を要求したのかもしれない。

（『三輪田米山日記を読む』創風社出版　二〇一一）

▲「雲棲」の書

この見方は今でも変わっていません。

また、山本發次郎は「書道試論」(『中央公論』一九三七、五)の中で、「書道に臨むその気構え」を、

第一　人に向かってかく書

第二　自己に向かってかく書

第三　自他を没却したる忘我三昧の書

と分け、第一は地上凡俗の書、第二、第三は天上超脱の書と述べています。山本が米山の書を第三の境地の書とみていたことは間違いなく、私は、その境地に入るためにお酒の力を借りたのではないかと思っています。

おわりに

米山の書の評判は、松山一円の神社の注連石や幟のおびただしい数を見れば明らかで、存命中からそういった評価を得ているところに、私は驚きを禁じえません。それは別の見方をすれば、現在これほどに評価されている米山の書を、明治の時代の伊予の人たちがきちんと見ていたという意味で、伊予の文化度の一つの尺度のような気もするのです。それは、正岡子規を生んだ風土と、まったく別のものではないでしょう。

米山の書が伊予の歴史的文化財であることは、疑いありません。

小池邦夫氏は「米山書は没後百年を経ても、人を元気にしてくれる」(『三輪田米山の芸術―鳥舞　魚躍』)と記されています。二百歳の今も、米山は変わらず、私たちに語り掛けてくれているのです。

[資料　米山関係主要文献]

・『山本發次郎遺稿』(山発産業　一九五三)

・浅海蘇山『米山　人と書』(墨美社一九六九)

・横田無縫、入山忍、棚田看山『三輪田米山游遊―いしぶみガイド』(木耳社　一九九四)

・成田山書道美術館『三輪田米山の書―近代という憂いのかたち』(里文出版　二〇〇四)

・山本發次郎『山本發次郎コレクション』(淡交社　二〇〇六)

・鄭麗芸『文人逸脱の書―池大雅・江馬細香・三輪田米山』(あるむ　二〇〇八)

・小池邦夫『三輪田米山の芸術―鳥舞魚躍』(清流出版　二〇〇八)

・米山顕彰会『米山の魅惑』(清流出版　二〇〇八)

・三浦和尚、福田安典編『三輪田米山日記を読む』(創風社出版　二〇一一)

・高澤浩一『三輪田米山　魂の書』(芸術新聞社　二〇一六)

三浦先生のプロフィール

三浦和尚(みうら かずなお)

●一九五二年広島県広島市生まれ

広島大学教育学部卒

●一九九六年愛媛大学教育学部教授

●二〇一二年愛媛大学教育学部長

愛媛大学大学院教育学研究科長

●二〇一五年愛媛大学副学長

現在、愛媛大学特命教授

三浦　和尚

秋彩る「松山市民文化祭」開催

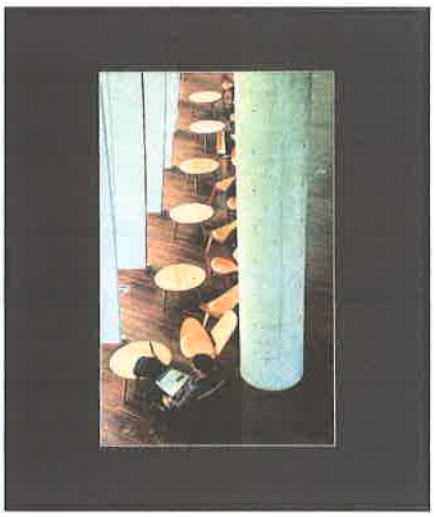
〈市長賞〉

「野ぶどう」(工芸部門)河野 光江

◎市長賞受賞　河野 光江さんの声

市長賞いただき、言葉にならないくらいうれしく思っています。作品は、和紙ちぎり絵の技法で制作したものです。何枚もの紙を重ねて自分の思う色を表現していきます。今後は自分の故郷の景色を作品にしたいと思っています。

〈市議会議長賞〉



「ラウンジの移ろい」(写真部門)
三瀬 清人

◎市議会議長賞受賞　三瀬 清人さんの声

作品は、左の窓の曲線、中央のテーブルと椅子の曲線、右の柱の直線、3本の線で奥行と動きが表現できて、一番下に座っている人物がアクセントになって、面白いと思いシャッターを切りました。フォトサークル季に入ってもう20年余りになります。今後とも、一瞬の光と影、形を切り取る感動を作品化していきたいと思います。

〈文化協会長賞〉

「夕焼け」(洋画部門)杉内 秀紀

◎文化協会長賞受賞　杉内 秀紀さんの声

妻の実家近くの、夕焼けに染まる空と田園風景を描いたものです。構図を決めるのに苦労しまして、仕上げるのに1カ月ほどかかりました。絵を始めて7年になります。カルチャースクールに通って勉強しています。絵を描く楽しさも難しさも、少しずつ理解できるようになりました。今後ともきれいな色を学んでゆきます。

〈教育長賞〉

「王瑶湘」(書部門)加戸 由理子(秀泉)

◎教育長賞受賞　加戸 由理子さんの声

受賞はとても光栄です。ありがとうございます。書を始めて15年になります。白い紙の上に黒い墨で書くのが好きで、心が落ち着きます。春風書道会に月4回通っています。今後とも身近な楽しみとしての書を続けていきたいものです。

第40回美術展

今回も多くの力作が出品された「美術展」は、記念すべき40回目の開催ということで、第40回記念賞が設けられました。洋画37点、日本画22点、版画12点、書218点、工芸26点、写真33点、彫塑1点、デザイン3点、総数 352点から、特別賞である「市長賞」、「市議会議長賞」、「教育長賞」、「文化協会長賞」の4点と第40回記念賞の6点、そして特選23点の受賞作品が選ばれました。

会期初日の「観賞会」は開催縮小のためございませんが、受賞作品には審査員の先生方のコメントを展示しております。ぜひ、地元の美術愛好家のみなさんの力作をご覧ください。

「会場」松山市総合コミュニティセンター 企画展示ホール(入場無料)
「会期」10月1日(金)～10月5日(火)9時～18時
初日は、開展式(10時～)終了後(午前10時30分頃)からの入場。
10月4日は休館。最終日は16時に閉展。

松山市民文化祭「第40回美術展」受賞者一覧

【市長賞】
【工芸】
◎「野ぶどう」　河野光江
【市議会議長賞】
【写真】
◎「ラウンジの移ろい」　三瀬清人
【教育長賞】
【書】
◎「王瑶湘」　加戸由理子（秀泉）
【文化協会長賞】
【洋画】
◎「夕焼け」　杉内秀紀
【第40回記念賞】
【洋画】
◎晩夏の炎　守谷順子
【日本画】
◎畑の春　田中由子
【版画】
◎秋声　八木文宏
【書】
◎佳句　栗林淳子（麗葉）
【工芸】
◎能面「小姫」　藤田正博
【写真】
◎海の記憶　胡田善友
【特選】
【洋画】
◎キャメルKで一休み　菊地康子
◎バラ（ドライフラワー）　福田美津貴
【日本画】
◎花　三好知枝
【書】
◎大伴田村大嬢の歌　石橋壯一（壯心）
◎天生我材必有用　河原田新
◎荒城の月　森藤良子

◎平家物語　清水昇（雅山）
◎天街小雨潤　渡部初子
◎白蓮のあまたハ…　香川珠子
◎佳句　桑原敬子（芳月）
◎李白詩　栗原清美（清泉）
◎七言二句　青木正光（碧雲）
◎佳句　林美希（美翠）
◎四字句　河野邦彦（篁光）
◎杜甫詩　増山洋子（洋蘭）
◎擬山園帖　田中鈴子（玉鈴）
◎羅虬詩　上甲百恵（白嶺）
◎松影　阿部美幸
◎柳宗元詩　新開幸吉（幸峰）
【工芸】
◎青不動　太田秀夫
◎能面 顰　佐々木公三郎
【写真】
◎蓮華　道土井友子
◎ゲット!!　芝毅
【功労賞】
【日本画】
◎紫陽花　小池キミヱ
【書】
◎賈至の詩　向井麗子（麗水）
◎佳句　鵜久森まゆみ（彩風）

「第40回芸術祭」 伝統芸能と現代芸能の祭典 10/17・24

松山市文化協会に所属する「音楽」、「舞踊」、「芸能」部門から42団体が出場して、日頃の活動成果を披露します。ぜひご観覧ください。発表の後に行う「お楽しみ抽選会」では、豪華景品が当たります。（景品は後日発送）

【会場】
松山市民会館大ホール（無料）※内容については変更になる場合がございます。

●10月17日(日) 10時~18時

①創流民謡会
②Michiyaの会
③伊予民踊研究会
④筑前琵琶一紅會
⑤都山流尺八中予幹部会
⑥生田流箏曲地唄三絃芙蓉会
⑦立石純子舞踊教室
⑧清の糸道 合奏団
⑨長唄杵家派 弥藤会
⑩長唄松山杵家会
⑪中島築山会
⑫愛媛県民踊指導者連盟
⑬日本舞踊河藤流河髙会
⑭若柳流 明珠会
⑮藤間流 ひな弥会
⑯紫雲館吾妻流剣詩舞道総本部
⑰風早会
⑱久谷地区伊予八百八狸保存会
⑲伊予源之丞保存会
⑳藤間流歌登美会
㉑藤間流 藤幸会
㉒伊予万歳みぞのべ椿会
㉓藤間流 藤々会
<お楽しみ抽選会> 予定

【出演団体（出演順）】

●10月24日(日) 10時~18時

①YELLOW STONES
②愛媛ジャズ体操教室
③かちまちジャズ倶楽部
④レイアロハグループ
⑤HULA KUMI EMA
⑥ハーモニーアルコ
⑦愛媛大学ギタークラブ
⑧草弦プロモーション
⑨久保勝鼓フラメンコスタジオ
⑩レアル アカデミア・ラ・シ　ジャ
⑪ノエミフラメンコスタジオ
⑫地紙直美フラメンコ教室
⑬Estudio la Perla
⑭バレエ スタジオ ミーム
⑮Feel Dance Academy
⑯真美フレッシュ体操 武田教室
⑰美佳バレエスクール松山
⑱アサダ・ダンス・スタジオ
⑲森田康二ジャズダンススタジオ
<お楽しみ抽選会> 予定

【出演団体（出演順）】

【松山の歴史】（その一）

廃藩置県一五〇年

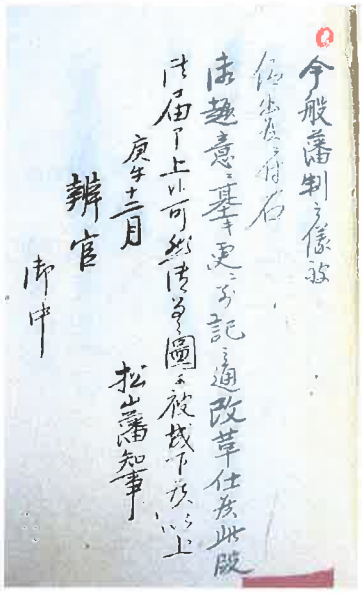
伊予史談会副会長
柚山 俊夫

今年二〇二一年は、明治四（一八七一）年、廃藩置県が行われて一五〇年にあたります。私たちの松山では、廃藩置県はどのように行われたのでしょうか。

廃藩置県とは、藩を廃止して県を置いた改革のことです。では、藩は、いつからあったのでしょうか。私たちは、「松山城」とともに「松山藩」という言葉を使いますが、実は、「松山御領」と記す文書はあっても、「松山藩領」と記した文書は、江戸時代にはありません。「松山藩」は、明治時代になってから使われた、行政組織や領域を表す新しい言葉です。

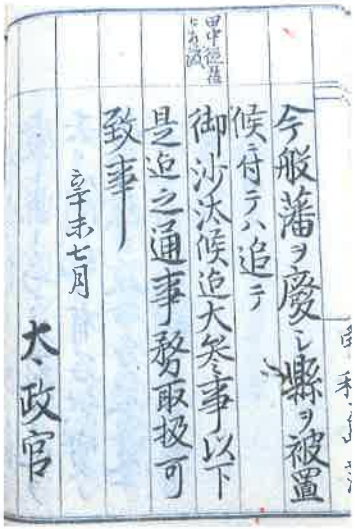
明治元（一八六八）年閏四月、府藩県三治制が実施され、旧幕府領を府または県と改め、大名の所領を藩と呼ぶようになりました。「松山藩」と公称するのは、この時からです。続いて、明治二（一八六九）年の版籍奉還により、藩主（旧大名）が領地・領民を天皇に返還し、新政府が形式上、全国の支配権を持つことになりました。藩主は、明治新政府から知藩事に任命され、家禄を受け取るようになったのです。

版籍奉還によって、藩主の家禄と藩の財政とは分離されました。しかし、藩主の力は実質的に温存されました。税は、江戸時代のまま、藩ごとに税の種類や税率が違っていました。新政府には、直属の軍隊がありませんでした。このような地方分権的な状況を変えて中央集権化を進め、国内の政治的統一を図るため、廃藩置県が断行されたのです。日本史上の大きな画期の一つといえます。



【松山藩知事の文書】
明治3年12月、藩知事から国の弁官（庶務担当）に宛て藩政改革を届け出た文書の控え。

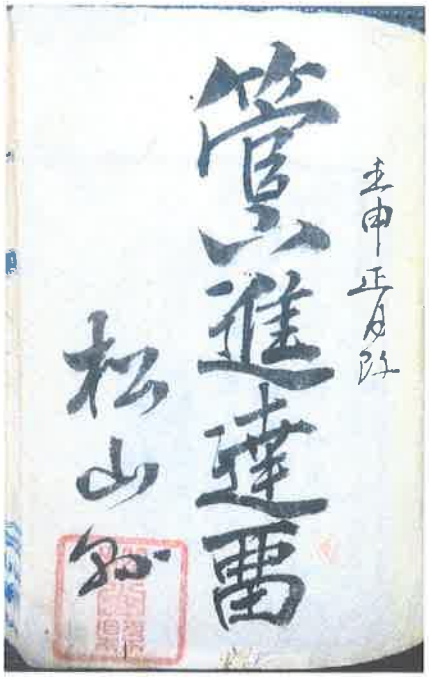
明治四（一八七一）年、政府は、まず、薩摩・長州・土佐の三藩から兵をつのって軍事力を固めたうえで、同年七月一四日、廃藩置県を命じました。藩を治めていた知藩事は罷免され、東京居住を命じられました。かわって、中央政府が派遣する府知事や県令が地方行政にあたることになりました。こうして、松山藩は松山県と改称されたのです。



【廃藩置県に伴う事務取扱】
知藩事は罷免されたが、次席職員である大参事以下は引き続き事務をするよう命じた太政官布告。愛媛県立図書館蔵「宇和島藩東京日記」による。

松山では、七月二四日に廃藩置県の知らせが入り、同日、領内にも伝達されました。すると、各地で旧藩主引き留め運動が始まりました。人々は、旧藩主がいなくなることで、政府の改革がさらに過激になることを恐れたのではないでしょうか。八月には、松山で庄屋らが、農民の動揺を理由に、旧藩主が東京へ行かないよう、引き留めを嘆願しています。

一方、久万山（現在の久万高原町など）で起こった、旧藩主引き留めなどを求める一揆に対して、八月一六日に、旧藩主の久松定昭が「多人数が集まっての嘆願は、旧情を思ってのことでありがたいが、徒党を組んで騒ぐのは、少しも私のためにならない。引き取り、落ち着いてほしい。」と呼びかけの文書を出しています。一九日には、久米郡（現在の松山市久米・小野地区など）にも騒ぎが広がり、県庁は一揆の鎮圧に乗り出し、二〇日に一揆の首謀者らを逮捕し、動揺の抑え込みに努めました。

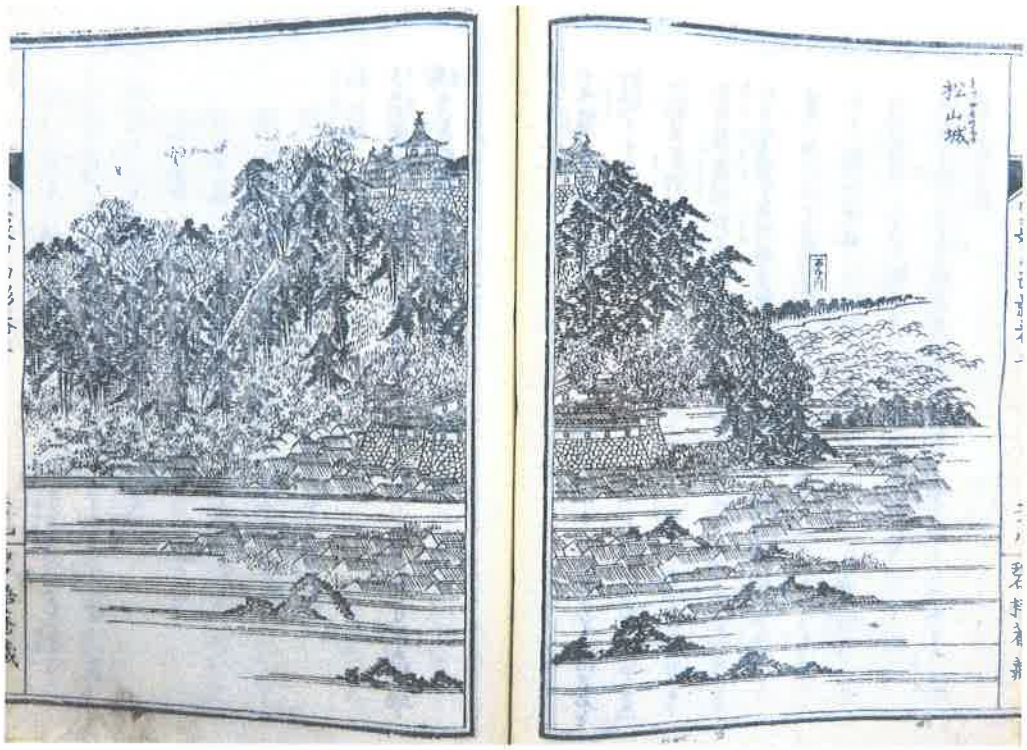


【松山県文書「管下進達留」】
愛媛県立図書館蔵。「壬申正月改」とあるので、伊予国東半部を占める松山県時代のもの。

旧藩主で松山藩知藩事を罷免された久松定昭は、九月九日、新県の大参事菅良弼に県の事務を引き継ぎ、一一日、松山城下を出発。万一の騒ぎに備え、兵の主力が城内に待機しました。松山城下を出発した旧藩主の久松定昭は駕籠に乗り、その行列は七〇〇～八〇〇人にも及んだそうです。途中、「お引き留め申す」と駕籠に駆け寄る人がいました。

書家で有名な三輪田米山が書き残した「米山日記」には、「御領内のもの五、六

万、雲霞の如く四方より群参す」とあり、大勢が沿道に出たことを記録しています。旧藩主一行は、三津浜から乗船。「米山日記」は続けて、「松山寛永御入部以来の太守、知事に転ぜられ、今度また知事御免」「老若男女袂をしぼらざるもの壱人もなし」と記しています。人々は泣きながら旧藩主の上京を見送り、名残りを惜しんだのです。



【幕末・明治初期の松山城と城下町】
半井梧菴『愛媛面影』(1869、愛媛県立図書館蔵)に掲載。城山の麓に北郭が、城山後景に石手川が描かれているので、城北方面から松山城を見た景観である。

柚山先生のプロフィール

柚山　俊夫(ゆやま　としお)

●一九六一年今治市菊間町生まれ

●愛媛大学を卒業、県立高校や県生涯学習センターでの勤務を経て現在、伊予高校教諭

◉松山市文化協会の会員になりませんか

松山市文化協会は、松山市内で活動する各分野の文化団体等の連携や新たな文化の創造を図ることを目的に、市民文化祭や会員主催事業の後援など、各種文化事業を実施しています。多くの文化団体のご入会をお待ちしております。また、協会の目的に賛同、後援いただく賛助会員もあわせて募集しています。お気軽にお問い合わせください。

◉本誌へご意見をお寄せください

本誌に掲載している内容について、ご意見をファクス、お手紙、メールでお寄せください。

〒790－0012
松山市湊町七丁目５番地
松山市総合コミュニティセンター内
松山市文化協会事務局
☎089(909)8008　FAX 089(909)3038
✉＝matsu-bunkyo@cul-spo.or.jp

▲松山市高浜沖に浮かぶ四十島

漱石先生も釣りしたのかな…

夏目漱石の小説『坊っちゃん』の中に釣りのシーンが描かれています。場所はこの四十島沖のような気がします。

チョーさんの 釣れる！サイト

釣りちょーさん 検索
http://tyo-san.co.jp

坂の上の雲ミュージアムからのお知らせ

坂の上の雲ミュージアムをよりいっそう楽しんでいただくための、様々な情報をお伝えします。ぜひチェックしてみてください。

■第14回企画展テーマ展示

『坂の上の雲』のひとびと　開催中

小説『坂の上の雲』には三人の主人公をはじめ、時代を懸命に生きたひとびとが数多く登場します。

公私ともに子規を支え続けたジャーナリストの陸羯南、日露戦争という巨大な試練に立ち向かった東郷平八郎や児玉源太郎、国家を背負って日露の講和を成し遂げた小村寿太郎や金子堅太郎など、明治という新しい時代に言論、軍事、外交の分野で活躍した魅力あふれるひとびとを紹介します。

期間：開催中～
　令和4年2月13日(日)
時間：9時～18時30分
　(入館は18時まで)
休館：毎週月曜日(休日は開館)
料金：一般400円
　高校生・65歳以上200円
　中学生以下無料

■公式インスタグラム開設

令和3年5月から、公式インスタグラムアカウントを開設しました。建物をはじめ、展示や周辺の風景など、坂の上の雲ミュージアムに関する様々な情報を発信中です。ぜひフォローをお願いします。

公式
インスタグラム
QRコード

お問い合わせ089(915)2601
※新型コロナウイルスの感染状況により、臨時休館の場合があります

子規交交 ―しきこもごも―

◎第一回『どこにも行けなくとも』

坂の上の雲ミュージアム学芸員
子規庵宇宙の会会員
上田一樹

松山出身の文学者、正岡子規が亡くなって一二〇年を迎えようとしている。子規の没年である明治三十五(一九〇二)年は、二年後の日露開戦を睨んで日英同盟が締結され、世界の国々の思惑が入り乱れる緊迫した国際情勢の最中であった。そして一二〇年後の令和の時代、日本を含む世界の国々はいま、新型コロナウイルスの感染拡大により、未曾有の危機にある。

この一年半あまり、コロナ禍における人流抑制のため、公私を問わず在宅時間が増えていることは言うまでもないが、明治を生きた子規は、亡くなるまでのおよそ五年半を、ほとんど自宅で過ごした。正確には、そうせざるを得なかった。かれは二十一歳で当時不治の病であった肺病(結核)となり、二十八歳の頃には結核菌が脊髄に達する脊椎カリエスの宣告を受けた。数度の手術に及んだが回復せず、やがて歩くことも、座ることも、寝返りすらも出来なくなった。

東京根岸の自宅「子規庵」の六畳間、わずか六尺(一畳分)の病床から、子規は己の存在を文学に乗せて発し続けた。意外と知られていないが、子規は自宅を仕事場とするようなプロの作家ではなく、職業は新聞記者である。子規は二十五歳から日本新聞社に勤めていたが、五年半の間ほとんど出社できず、結果として自宅で原稿を書いた。代表作の「病牀六尺」をはじめとする数々の新聞連載は、在宅勤務の中で生まれた。この勤務形態は、同社の社長兼主筆である陸羯南による最大限の理解と援助の賜物であった。

子規晩年の文学は、そのような限られた条件と空間の中で紡ぎ出された。子規がこよなく愛した庭の草花をはじめ、身のまわりの什物、日々の出来事、周囲の会話など、五感に触れる全てが文学表現の材料となった。

▲正岡子規写真。明治33年4月、子規庵の六畳間で撮影。(松山市立子規記念博物館所蔵)

一匕のアイスクリームや蘇る　明治三十二年

黒キマデニ紫深キ葡萄カナ　明治三十五年

蝶飛ブヤアダムモイヴモ裸也　明治三十五年

風板引け鉢植の花散る程に　明治三十五年

一二〇年経っても変わらない、アイスクリームを食べて「蘇る」感覚。色彩の深奥を探るように眼前の葡萄を見つめる一方、飛ぶ蝶から原初の人間に思いを馳せる句法と発想のコントラスト。「風板」は河東碧梧桐が製作した風を起こす道具。新し物好きの子規は、花を散らす程の風力を悪戯っぽく期待するが、かれ自身に風板を引く力は残されていない。

足たゞ北インヂヤのヒマラヤの
エヴェレストなる雪くはましを　明治三十一年

松の葉の葉毎に結ぶ白露の
置きてはこぼれこぼれては置く　明治三十三年

いちはつの花咲きいで、我目には
今年ばかりの春行かんとす　明治三十四年

短歌もまた、同じ空間で作られたのかと思う程に豊かな表情を見せる。病床を離れて為す壮大な願望に驚かされたかと思えば、身近な松の葉の白露へ透徹した眼差しを向ける。そして、いちはつの美しい花と共に意識される余命僅かな「われ」。動きたくても動けない、動かしがたい現実がある。

随筆においても、その着想は実に多彩である。庭の草花への愛を句入りの図と共に綴った「小園の記」(明治三十一年)、雲を支点に日常の瑣事を記した「雲の日記」(明治三十二年)、周囲で聞こえる音に焦点をあてた「夏の夜の音」(明治三十二年)などがある一方、死後の自分が幽体となり、自らの葬式や墓の様子を落語調で語る「墓」(明治三十二年)、松山や東京の縁の場所を巡る夢を題材とした「初夢」(明治三十四年)など、子規の文学は空想と写実を自在に行き来した。子規は「俳諧大要」(明治二十八年)の中で「空想と写実と合同して一種非空非実の大文学を製出せざるべからず」と述べたが、晩年、その境地に迫ったのかもしれない。

以上、子規の在宅文学を少しではあるが紹介してみた。執筆にあたり、改めて晩年の子規作品を読み直してみたが、何気ない日常で様々な「気付き」があることを思い知らされる。子規の文学には、かれが命の期限を日々強く意識していたことが見え隠れする。しかし、それでも子規は、文学に打ち込みながら一日一日を精一杯、平気で生きようとした。令和のコロナ禍を生きる私たちは、ふるさとの先輩である子規の生き方に、何かヒントを見出せるのではないだろうか。

今後も、子規にまつわるエピソード、かれの人生の様々な場面を、代わる代わる紹介していきたい。皆さんもぜひ、子規の文学を手に取っていただければと思う。

三輪田米山生誕二百年記念特別展

三輪田米山×小池邦夫

in 坂の上の雲ミュージアム

松山出身の書家、三輪田米山の足跡と作品、米山の顕彰を続ける絵手紙作家の小池邦夫氏の活動などを紹介する特別展です。

米山が松山にのこした宝を、身近に感じてもらうきっかけとなれば幸いです。

会　　期：令和3年9月28日(火)～11月28日(日)
休 館 日：毎週月曜日(11月1日、22日は開館)
開館時間：午前9時～午後6時30分(入館は午後6時まで)
場　　所：坂の上の雲ミュージアム　2階ホール
観 覧 料：無料
主　　催：三輪田米山生誕二百年記念事業実行委員会
共　　催：愛媛新聞社
記念講演：令和3年10月31日(日)午後2時～3時30分
演題　地域文化として見た米山
講師　三浦和尚 氏(三輪田米山生誕二百年記念事業実行委員会委員長、愛媛大学俳句・書文化研究センターセンター長)
坂の上の雲ミュージアム2階ホール／聴講無料／定員30名(当日先着順)

お問い合わせ：事務局　松山市文化・ことば課　089(948)6952
：特別展担当　坂の上の雲ミュージアム　089(915)2601

※新型コロナウイルスの感染状況により、臨時休館の場合があります

文化情報松山「きらめき」秋号
第97号・毎回1,500部発行　非売品

編集・発行／松山市文化協会

(事務局)松山市総合コミュニティセンター内
☎089(909)8008 FAX 089(909)3038
企画取材／株式会社ナガシマ

あなたの大切な資産運用、
プロにご相談ください。

ご相談内容
相続関係、事業承継、税金対策
年金・社会保険、資産運用
労務等金融に関する相談

相談員 愛媛銀行の専門家
税理士・社会保険労務士 等

詳しいお問い合わせは
ソリューション営業部 金融コンサルティング室 または お近くの窓口へ
月～金(祝日除く) 平日9:00～17:00 https://www.himegin.co.jp/
愛媛銀行 TEL 089-933-1111